

D-18

Hot flush に対する苓桂朮甘湯合桂枝加竜骨牡蛎湯又は合柴胡加竜骨牡蛎湯の効果

川 田 信 昭

(医) 昨雲会附属有隣病院産婦人科

吉 谷 徳 夫

新潟大学医学部産婦人科

緒言：hot flush は、前胸部から顔面にかけて発作性に生じる熱感で、西洋医学では、これを間脳の血管運動中枢の失調によるものと考えている。一方、漢方医学では病因を気の上衝、気滯、瘀血、血熱、陰虚と考え多種の方剤をその治療薬にしているが一般に、漢方治療ではホルモン療法のような確実な効果は期待できないと言われている。そこで、演者らは日常の臨床経験より、hot flush は気の上衝が関与している場合が多いのではないかと考え、代表的な気逆改善剤である苓桂甘藷湯を目標にした(TJ-39) 苓桂朮甘湯合(TJ-26) 桂枝加竜骨牡蛎湯又は(TJ-12) 柴胡加竜骨牡蛎湯の二剤併用療法を行ってみた。その結果、良好な成績が得られたので case report と文献的考察を加えて報告する。

対象及び方法：対象は最近4年間に hot flushを伴う不定愁訴で当科を受診したもののから、著明な低血圧症の認められたものを除いた34名で平均年齢は46.9才であった。治療方法は、患者を腹力が弱く腹壁の薄いA群と腹力が中等度から強度で腹壁の厚いB群のいずれかに分け、A群には (TJ-39)合 (TJ-26)を、B群には (TJ-39)合(TJ-12)を、各々7.5g/日で投与した。その結果A群21例、B群13例であった。hot flush に対する治療効果は、症状が消失した著効例は12例 (35.3%、A群9例、B群3例) 症状が気にならない程に改善した有効例は15例 (44.1%、A群7例、B群8例) 無効例は4例 (11.8%、A群3例、B群1例)、脱落例3例 (8.3%、A群2例、B群1例) で、27例 (79.4%) で患者が満足した効果が得られた。効果の発現した時期は27例中24例 (88.9%) が治療開始後2週間以内であった。又、随伴したその他の不定愁訴に対する治療効果は、hot flush に効果のあった27例中26例 (96.3%) に満足する効果が認められ、特に発汗や動悸、不安、イライラ感、優うつ気分、不眠症などの改善が著明であった。

考察：hot flush の発症機序として、estrogenが脳内のカテコラミン代謝に影響を及ぼすためとする考え方が現在の有力説と思われるが、一方、寺沢らが苓桂甘藷湯が奏効した奔豚気病例で、治療後血中のエピネフリン、ノルエピネフリンの低下が認められたと報告している。そのため、苓桂甘藷湯を目標にした今回の二剤併用療法は、hot flush を伴う不定愁訴に試みるべき価値のある治療法の一つではないかと思われた。